

2022 年 12 月

食料安全保障月報

(第 18 号)



令和 4 年 12 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 12 月食料安全保障月報（第 18 号）

目 次

概要編

I	2022 年 12 月の主な動き	1
II	2022 年 12 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「中国の穀物生産・貿易動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 輸出価格が高水準で 2022/23 年度の輸出量は低迷	
	＜カナダ＞ 普通小麦、デュラム小麦とも、品質は前年度に比べ良好	
	＜豪州＞ 生産量は前月予測から上方修正され、史上最高の 36.6 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 土壌水分は十分となり、2023/24 年度の冬小麦の生育は順調	
	＜中国＞ 10 月の小麦輸入は、カナダ、米国からの輸入シェアが大幅に増加	
	＜ロシア＞ 輸出が好調となり 10 月、11 月は前年同月を上回る輸出量	
	＜ウクライナ＞ 輸出量は上方修正も、前年度に比べ 33.7%減少の 12.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 35%減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の価格が高止まり。輸出量は減少	
	＜インド＞ ラビ米の作付けは前年度よりも速いペースで進捗	
	＜中国＞ 収穫は 11 月末に終了。南部の干ばつ等で前年度より減産。	

<タイ> 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し
<ベトナム> 中国やインドネシアからの需要が増加

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
<米国> 生産量は減産、輸出減の見通し
<ブラジル> 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し
<アルゼンチン> 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.7 倍（輸出税継続）
<中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し
<カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7
（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

【利用上の注意】

表紙写真：ウクライナ・ポルタバ州のとうもろこしの収穫（12 月 1 日撮影）
降雨過多で収穫が遅れた。

(概要編)

I 2022 年 12 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫がほぼ終了し、南米では生育期を迎えている。

品目別にみると、12 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているものの、高水準で推移している。11 月 19 日に期限を迎えたウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 120 日間(2023 年 3 月 19 日)延長された中、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、米国や欧州の乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：11 月）については、10 月から概ね横ばいで推移（135.9→135.7）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年 11 月の値は 135.3、前々年 11 月の値は 105.6）。

海上運賃については、前年 10 月に、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が前年 10 月に、2008 年のリーマン・ショック後の最高値を記録したものの、本年 12 月は、その最高値から 7 割程低下し、直近 5 カ年の平均値とほぼ同じ水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、12 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の12月16日報告によると、2022/23年度の小麦は収穫が終了し、収穫予定面積のほぼ100%に当たる1,940万トンが収穫された。とうもろこし等の夏作物も収穫が本格化し、とうもろこしは収穫予定面積の70%に当たる1,840万トンが収穫された。

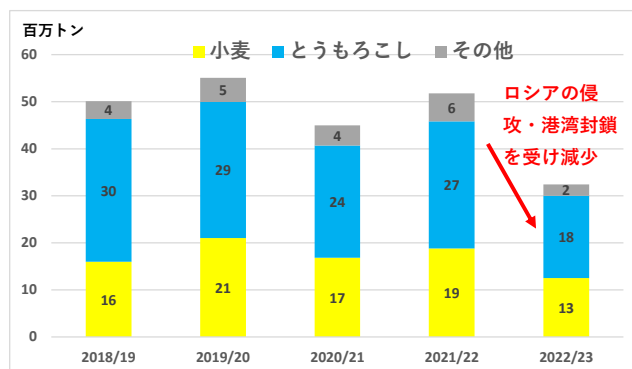
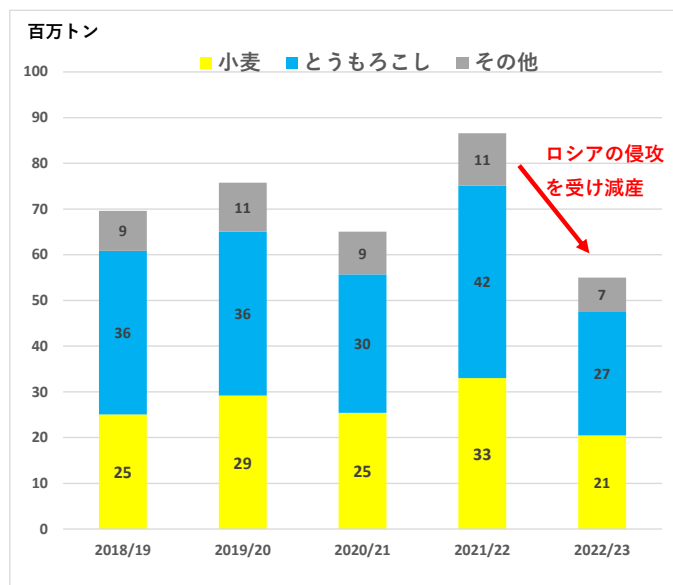
2023/24年度の冬小麦の作付けは、11月28日報告によると計画の95%に当たる380万ヘクタールが終了した。

7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（当初11月19日まで）を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開されており、さらに、11月には2023年3月19日まで延長された。11月30日時点で、輸出量は1,234万トン（うち、とうもろこし516万トン、小麦359万トン他）。目的地はスペイン、トルコ、中国、イタリア等。

米国農務省（USDA）の12月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量は、前月見通しから変更はなく2,050万トン（対前年度比38%減）、輸出量は前月から150万トン上方修正され1,250万トン（同34%減）の見通し。

一方、とうもろこしの生産量は、収穫期の降雨過多やロシアの攻撃による収穫遅れにより前月から450万トン下方修正され2,700万トン（同36%減）、輸出量は、前月見通しから200万トン上方修正され1,750万トン（同35%減）の見通し。

（参考）ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.12)

1 米国の穀物輸出は伸び悩み

2022/23 年度の米国のとうもろこし、大豆は 11 月中旬でおおむね収穫が終了した。小麦はすでに収穫が終了している。米国農務省の 12 月見通しで、生産量は前月と比較して変更はなかったが、夏季のコーンベルトの一部での高温乾燥の影響から、とうもろこしは対前年度比 8 % 減の 3 億 5,380 万トン、大豆は対前年度比 3 % 減の 1 億 1,830 万トン、小麦は前年度よりわずかに増加の 4,490 万トンと見込まれている。

輸出量は、とうもろこしは前年度比 16 % 減の 5,270 万トン、大豆は同 5 % 減の 5,570 万トン、小麦は同 3 % 減の 2,110 万トンが見込まれている。

ミシシッピ川流域の降雨不足により、10 月の水位が 1927 年の観測開始以来の最低水準となり、11 月以降も低水位が継続しており、はしけ運賃は高水準で推移していること等から他国産と比べ輸出競争力が劣ることが要因とみられている。なお、農産物や食料品の輸送に影響があるとして懸念されていた鉄道ストライキについては、12 月 2 日にバイデン大統領が貨物鉄道スト回避法案に署名し、回避された。

2 豪州の小麦、菜種は史上最高の豊作見通し

豪州農業資源科学局 (ABARES) の 12 月 6 日公表のクロップレポートによれば、2022/23 年度の収穫期を迎える冬作物は、ウェスタンオーストラリア州やサウスオーストラリア州等で天候に恵まれ史上最高となるなど、豪州全体でも史上 2 位の 6,200 万トンとなる見通し。小麦と菜種に関しては、それぞれ 3,660 万トン (対前年度比 1 % 増、過去 5 年対比 51 % 増)、730 万トン (同 4 % 増、80 % 増) となり、過去最高であった 2021/22 年産を上回る見通し。大麦は史上 4 位の豊作となる 1,340 万トン (同 4 % 減、18 % 増) の見通し。

一方、ニューサウスウェールズ州では、降雨過多や洪水の影響で前年度より減産となる見通し。

2022/23 年度の作付けが終了した夏作物については、ソルガムは史上 4 位の 260 万トン (対前年度 4 % 減) が見込まれているが、コメについては 降雨過多により作付面積が大幅に減少し、前年度より約半減となる 34 万トン (もみベース) の見通し。

3 カナダ穀物・油糧種子は前年の干ばつから大きく回復する見通し

カナダ統計局の 12 月 2 日公表の 2022 年の主要作物の生産見通しによれば、過去最高の 2020 年の水準には及ばないものの、天候に恵まれ、前年の西部の干ばつによる減産から大きく回復する見通し。なお、9 月公表時点より下方修正された。

主に、カナダ西部で栽培されている小麦については、収穫面積、単収とも前年より増加し、史上 3 位の豊作となる 3,380 万トン (対前年比 52 % 増、過去 5 年平均対比 10 % 増)。うちデュラム小麦は 540 万トン (同 79 % 増、7 % 増) となっている。菜種については、収穫面積は減少したものの単収が大幅に増加し、1,820 万トン (同 32 % 増、5 % 減)。大麦についても同様に、収穫面積は減少したものの単収が大幅に増加し、1,000 万トン (同 44 % 増、13 % 増) の見通し。

一方、カナダ東部で主に栽培されている大豆については、収穫面積は減少したものの単収が増加し、650 万トン (同 4 % 増、4 % 減) の見通し。

Ⅱ 2022 年 12 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月末、280ドル/トン台前半で推移。12月に入り、黒海諸国からの小麦供給が潤沢なことや、豪州の豊作等から250ドル/トン台後半に値を下げたものの、ロシアの攻撃でウクライナの港が一時閉鎖されたことに伴うウクライナからの穀物輸出の不透明感や、米国産の輸出需要への期待から270ドル/トン台後半に値を上げた。その後、世界の景気の減速懸念等から値を下げ、12月下旬現在、270ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、11月末、260ドル/トン前後で推移。米国の輸出需要低迷の懸念等から、12月上旬に240ドル/トン半ばまで一時的に値を下げた。その後、ロシアの攻撃でウクライナの港が一時閉鎖されたことに伴うウクライナからの穀物輸出の不透明感や、米国の輸出成約が好調となったこと、大豆価格のつれ高等から緩やかに値を上げ、12月下旬現在、250ドル/トン台後半で推移。

コメは、11月末、470ドル/トン前後で推移。12月に入り、更なるバーツ高や、インドネシアにおける政府備蓄不足に対処するためのタイからの輸入等により値を上げ、12月下旬現在、490ドル/トン台前半で推移。

大豆は、11月末、540ドル/トン前後で推移。12月当初、米国環境保護庁（EPA）によるバイオ燃料消費義務量の提案が市場予想を下回ったことなどから520ドル/トン台半ばまで値を下げた。その後、アルゼンチンでの干ばつの影響を懸念した大豆粕価格の上昇、中国のゼロコロナ政策の緩和の動きに伴う大豆輸出が拡大するとの楽観的な見方等から値を上げ、12月下旬現在、540ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 840 万トン下方修正され 27.4 億トン。消費量は、前月予測から 680 万トン下方修正され 27.7 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.4 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.7 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

（注：数値は 12 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 による）

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.2%となる見込み。

（注：数値は 12 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」 による）

V 今月の注目情報：中国の穀物生産・貿易動向

2022年の中国の食糧生産（穀物・豆類・イモ類）は、長江流域で夏季の干ばつの影響があったものの、東北から北部の穀倉地帯では天候に恵まれ、国家統計局によれば前年度を0.5%上回る6億8,700万トンとなった。

一方、穀物需要については、2022年は経済の減速などから伸び悩んだものの、ロシアの侵攻を受けたウクライナや米国からの輸入減少を受けて、11月にはブラジル産とうもろこしの輸入を開始した。12月7日には中国政府がゼロコロナ政策の緩和を公表したが、今後の見通しも含め、中国の穀物生産と貿易動向、世界の穀物需給への影響についてまとめた。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、中国のとうもろこしは2022年10月から2023年9月。国や作物によって異なる（品目別需給編P.27参照）。

1. 中国の穀物生産動向

12月12日公表の国家統計局「2022年糧食生産量データ」によれば、2022/23年度の中国の食糧生産（穀物と豆類とイモ類）は6億8,653万トン（コメはもみベース）の見通し。対前年比0.5%増産となり、8年連続で13,000億斤（1斤=500gで6億5,000万トン相当）の生産目標を達成した。中でも大豆生産の増加が目立っている。地域別では特に前年洪水の影響があった河南省で本年は天候に恵まれ、生産量が回復する見通し。

（1）小麦

播種面積は前年をわずかに下回った

が、単収が1.0%増加したことから、生産量は前年比0.6%増で史上最高の1億3,772万トンの見通し。2021年末の降雨過多により作付け遅れとなったが、その後の生育が順調であったことが単収改善の要因とみられる。

（2）とうもろこし

単収が前年比2.3%増加し、大豆振興政策による作付面積の減少（0.6%）をカバーし、生産量は前年比1.7%増で史上最高の2億7,720万トンとなる見通し。主産地の東北地区が天候に恵まれたことにより単収が増加したと推測される。

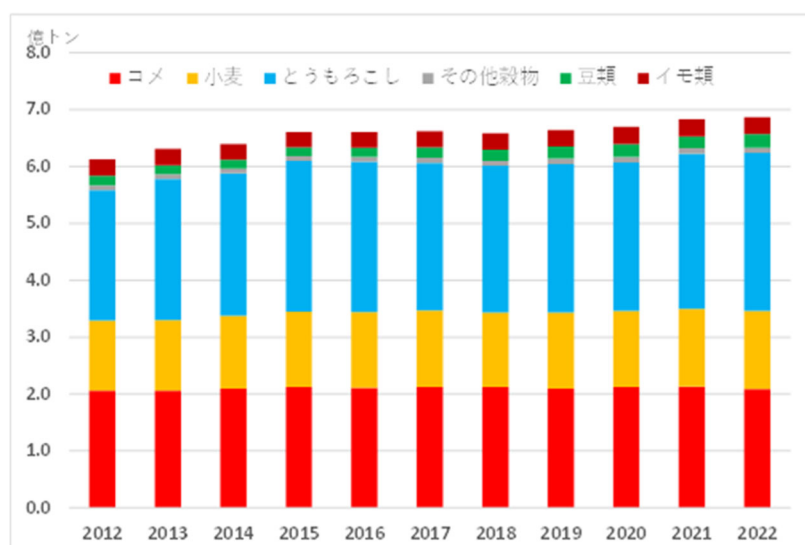
（3）コメ

播種面積が前年比1.6%減少したことや、ジャポニカ産地の東北地区は天候に恵まれたものの、インディカ産地の長江流域の夏季の干ばつなどの影響から、コメ全体で単収が0.5%低下したため、前年比2.0%減の2億850万トン（もみベース）となる見通し。

（4）大豆

とうもろこしとの複合栽培の奨励を含め、強力な大豆振興政策により、播種面積が前年比21.7%増加し、単収も1.6%増加したことから、前年比23.7%増となる史上最高の2,029万トンの見通し。

図1 中国の穀物、豆類、イモ類の生産量の推移



出典：中国国家統計局資料(2022.12.12)を農林水産省で加工

2 需要と輸入動向

米国農務省（USDA）の12月見通しによれば、2022/23年度の中国の穀物（小麦、とうもろこし、精米等）需要量は、前年度比1%減の6億1,885万トンとなっている。中国の穀物需要量が前年度を下回るのは、その前年度が大きく不作となった2004/05年度以来である。背景には最近の中国の経済減速や、12月まで実施されていたゼロコロナ政策などの影響もあるとみられる。

一方、大豆については、畜産向けの大豆需要の増加から、前年度を上回っている。

（1）小麦

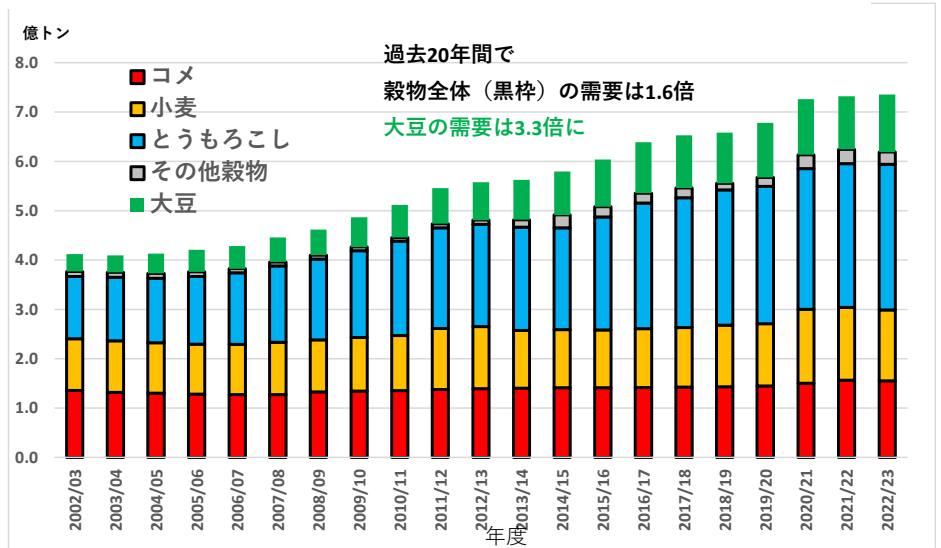
USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度より3%減の1億4,400万トンの見込みである。2019/20年度は、アフリカ豚熱の発生を受け減少していた畜産向け飼料需要の回復に伴い、とうもろこし価格が高騰し、小麦の取引価格を上回ったため、代替としての飼料向け的小麦需要が増加した。しかし、2021/22年度以降、とうもろこしの価格が小麦を下回った結果、小麦の需要は減少に転じている。

2022年の輸入については、前年同月を上回るペースで、輸送距離が近い比較的低価格の豪州産を輸入してきたが、10月にはカナダ産、米国産の輸入量が大きく増加し、同月の輸入量は合計で前年同月の48万トンを大きく上回る124万トンとなった。この結果、1～10月の輸入量は780万トンと前年同期比97%となっている。10月に米国、カナダ産の輸入が増加した背景には、7月のウクライナの黒海から穀物輸出合意や米国・カナダ産春小麦の増産見通しなどによる小麦相場下落も要因と考えられる。

（2）とうもろこし

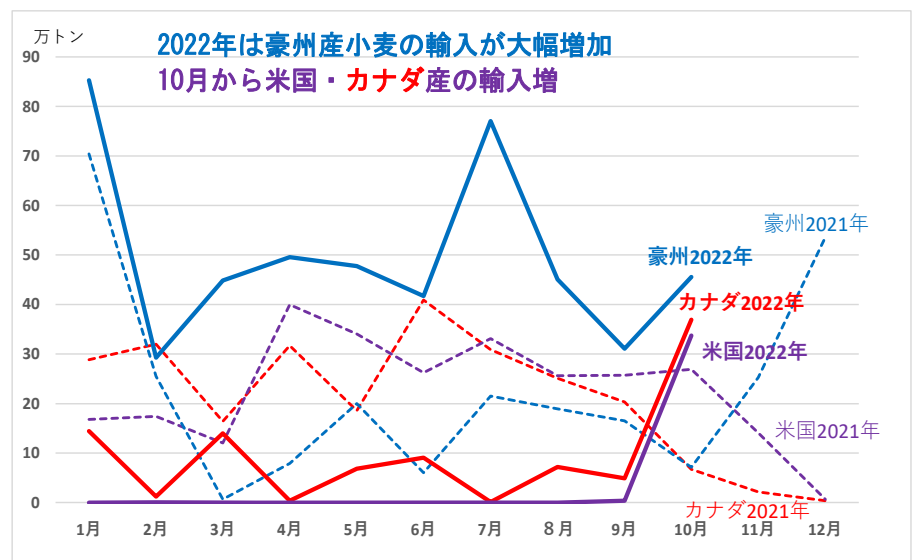
USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度比1%増の2億9,500万トンの見込みである。一時期小麦の価格を上回っていたとうもろこし価格が小麦の価格を下回って推移している

図2 中国の穀物、大豆需要の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2022.12）を農林水産省で加工

図3 中国の米国、カナダ、豪州からの小麦輸入量の推移



出典：中国海関統計を農林水産省で加工

ことから、飼料需要を中心に伸びているとみられる。

中国は主に、米国とウクライナから輸入してきたが、2022年の輸入量については、2月のロシアのウクライナ侵攻によるウクライナからの輸入とともに、米国からの輸入が大きく減少したことから1-10月の輸入量は1,901万トンと前年同期比72%と大きく減少している。輸入量に占める米国産のシェアは7割以上となっている。

しかし、これまでほとんど輸入していなかったブラジル産とうもろこしに関し、本年5月に検疫条件などで合意しており、報道等によると、中国海関（税関）が11月上旬に、ブラジル産とうもろこし輸出業者リストを更新し、11月下旬には輸入が開始された。

(3) コメ

USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度より1%減の1億4,700万トンの見込みである。長江流域の干ばつによる減産もあったが、食用需要も頭打ちとなっており、中長期的な動向にも注意する必要がある。

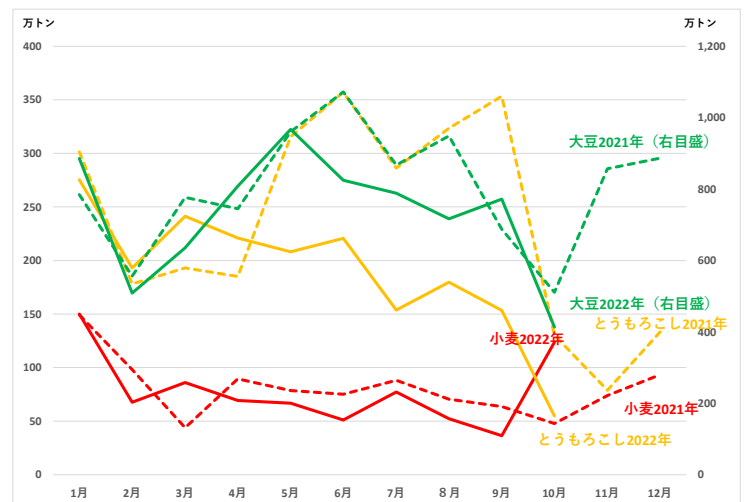
2022年の輸入については、2月以降、前年同月を上回るペースで輸入増加しており、1-10月の輸入量は、542万トンと、前年の年間輸入量（387万トン）を上回った。小麦やとうもろこしの国際価格高騰により、飼料向け需要を中心に代替として、比較的低価格のインド産碎米の輸入が増加したことが背景にあるとみられる。ただし10月の輸入量は9月より減少したが、この背景として、干ばつの影響を受けたインドの9月からの碎米の輸出禁止や小麦などの国際価格の下落等があるとみられる。

(4) 大豆

USDAによれば、2022/23年度の需要量は前年度より9%増の1億1,660万トンの見込みであり、畜産向け需要の増加に伴い増加する見通しである。

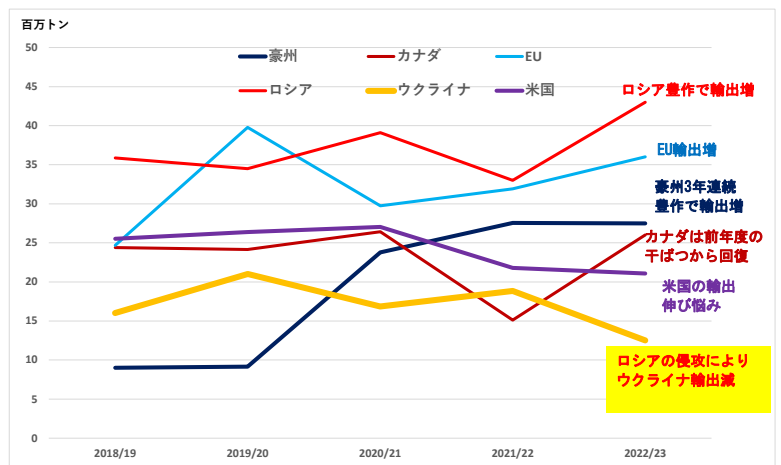
しかし、2022年の輸入については、1-10月の輸入量は7,320万トンで前年同期比93%と減少している。輸入量のうち67%をブラジル産が占め、米国産のシェアは28%と前年（34%）より低下している。輸入量減少の背景として、大豆の搾油マージンの悪化などがあるとみられている。

図4 中国の小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



出典：中国海関統計を農林水産省で加工

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.12)を農林水産省で加工

3 国際貿易への影響

(1) 小麦

主要輸出国では、ロシアの侵攻を受け減産見通し（USDAによると2,050万トン）となっているウクライナを除き、豪州で3年連続豊作（同3,660万トン）となり史上最高を更新し、ロシアでも史上最高の豊作（同9,100万

トン)が見込まれている。カナダでも干ばつだった前年度を大きく上回り、過去5年平均を上回る見通し(同3,382万トン)。このような主要輸出国の豊作見通しやウクライナからの輸出再開を受け、ウクライナ侵攻前の水準まで国際相場が下落した。

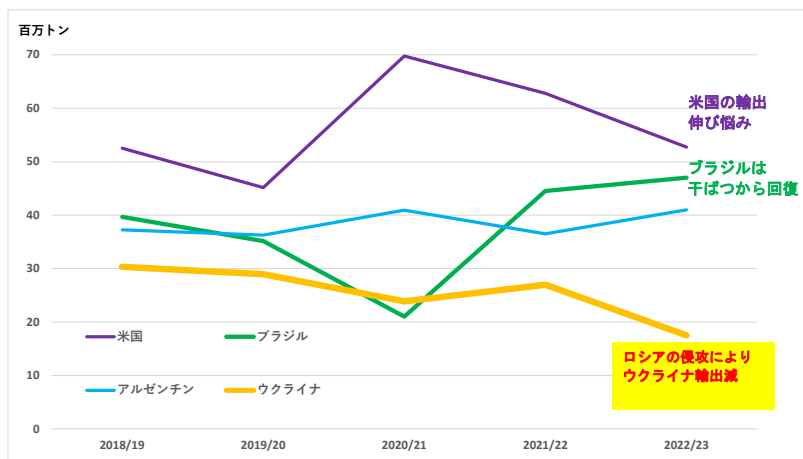
12月7日のゼロコロナ政策の緩和を受け、今後中国の輸入が増えるとの見方もあるが、今のところ目立った動きはない模様である。最近の豊作もあり、中国における小麦の備蓄が十分にあることが背景にあるとみられる。

(2) とうもろこし

主要輸出国では、小麦と同様に、ロシアの侵攻によりウクライナで減産(同2,700万トン)、輸出量も減少、米国でも中西部の高温乾燥で減産見通し(同3億5,380万トン)のため輸出が伸び悩んでいる。輸入国側では、EUが夏季の干ばつにより減産となり、輸入量は中国の輸入量を上回る見通しである。

一方、ブラジルでは2021/22年度の冬とうもろこしが豊作となったことから、EUを始め各国からの需要が集中している。冬とうもろこしの収穫が終了した11月に中国もブラジル産の輸入を開始した。ただし、業界関係者の中では、中国によるブラジル産の輸入が本格化するのには2023年に入ってからとの見方もある。

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.12)を農林水産省で加工

(3) コメ

インドの輸出規制や洪水の影響を受けたパキスタンの輸出減少により、中国の10月のコメ輸入は減少した。しかし、中国のコメも減産となっており、豊作見通しのタイ産への切り替えも含め、今後の輸入動向に注視が必要である。

(4) 大豆

米国が前年度より減産となったが、ブラジルでは適度な降雨に恵まれて作付けが順調に進展し、生産量の見通しは1億5,000万トンを超えることから、世界の大豆の在庫率は27%と前年度より上昇する見通しである。

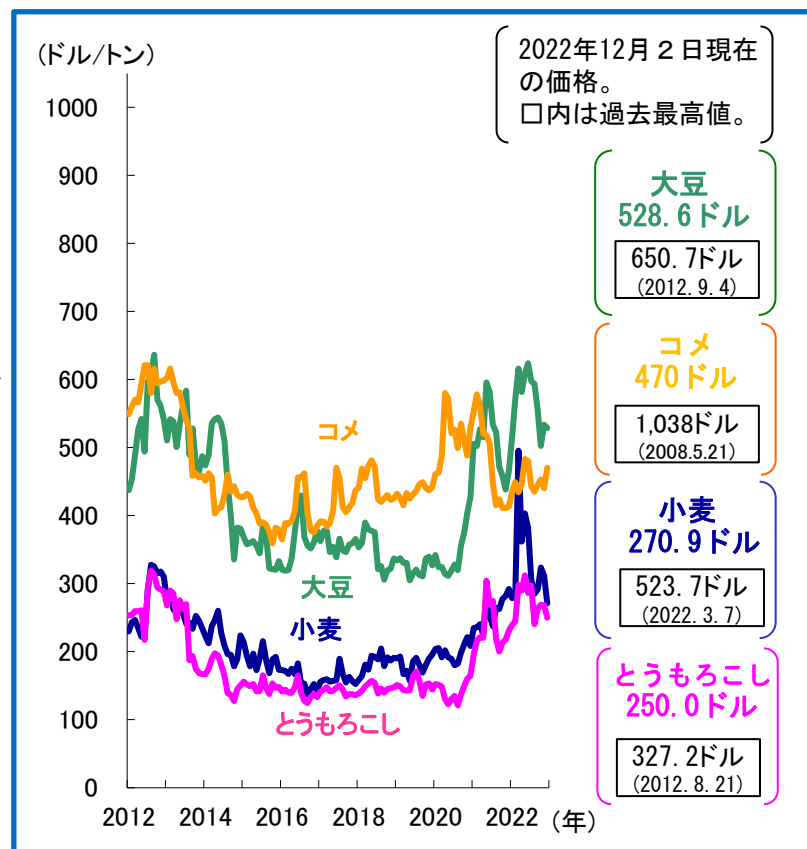
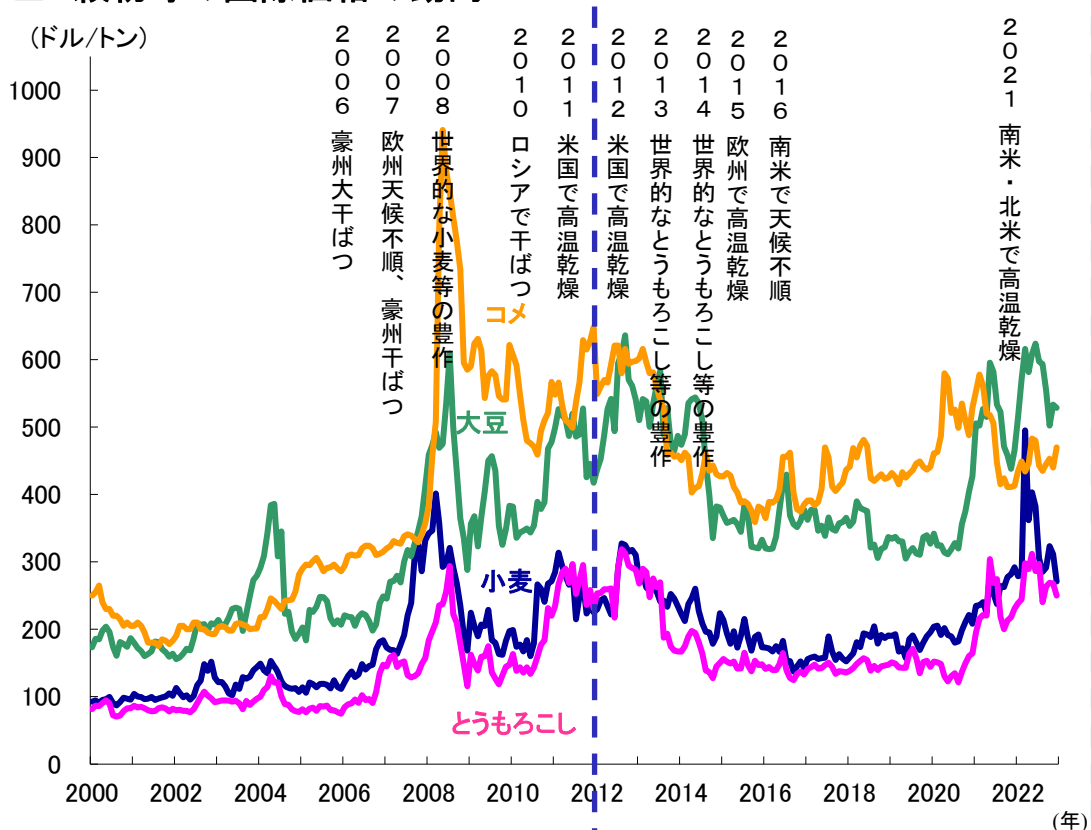
このような状況の中、ゼロコロナ政策の緩和を受け、中国経済が活発化し、需要増加期待からシカゴの大豆相場が一時上昇した。小麦やとうもろこしと異なり、この時期、南米産大豆は作付けから生育期で、輸出が可能なのは米国産に限られることが背景にあるとみられる。

しかし、ゼロコロナ政策の緩和後、中国国内で感染者が急増しており、中国内の物流が混乱しているとの報道もある。現時点でゼロコロナ政策緩和が中国の穀物需要や輸入にどのような影響を与えるか見極めるには不確定要素が多いが、引き続き、中国の穀物需要や輸入状況を注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



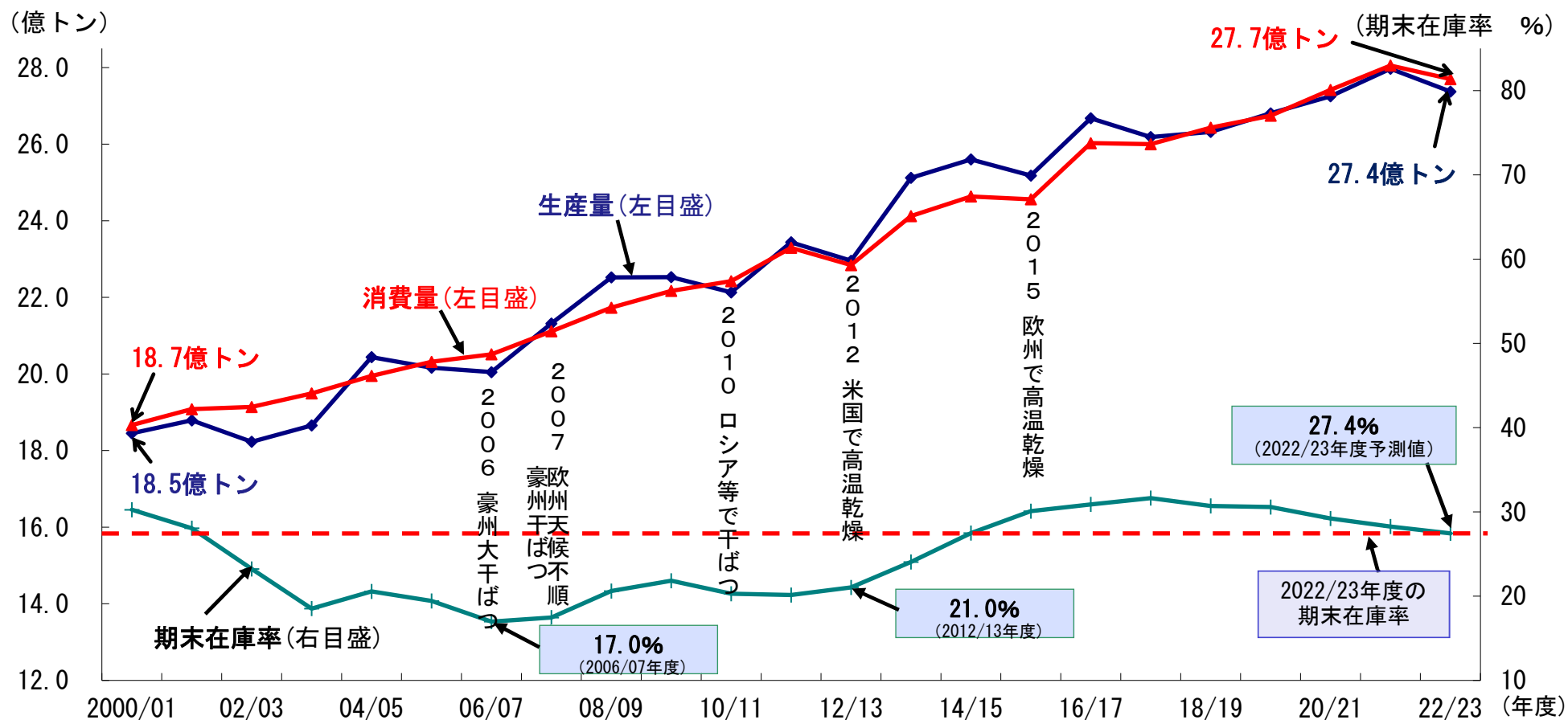
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、2022年12月2日現在のコメ価格は、2022年11月30日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

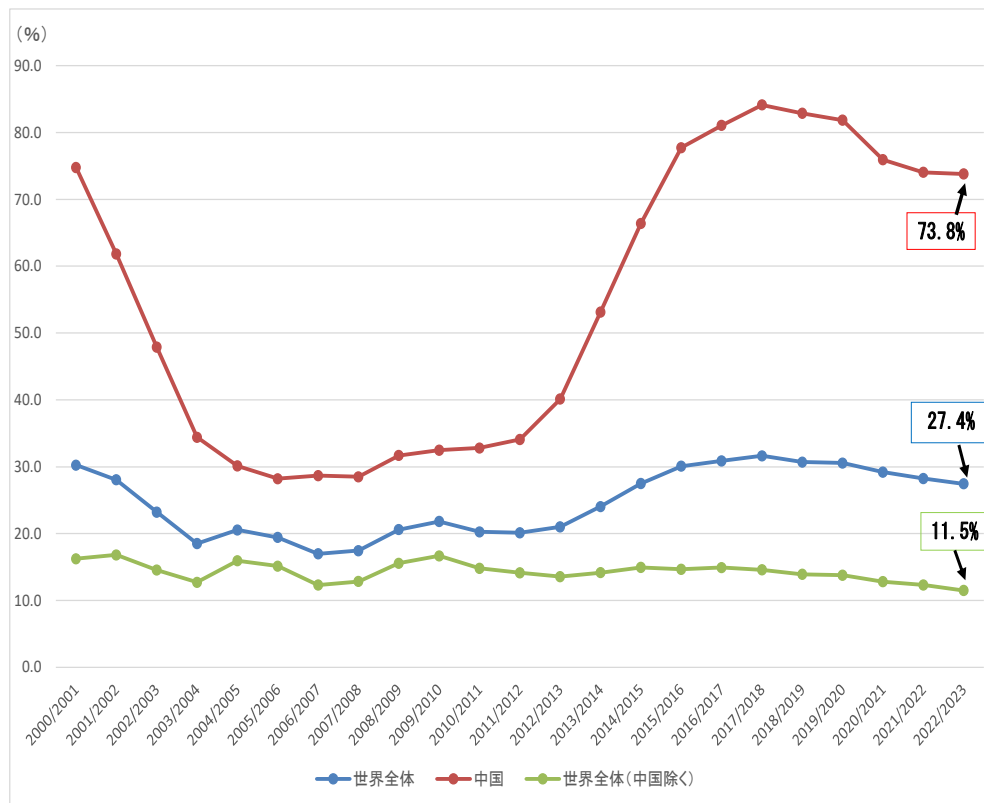


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (December 2022)、「PS&D」

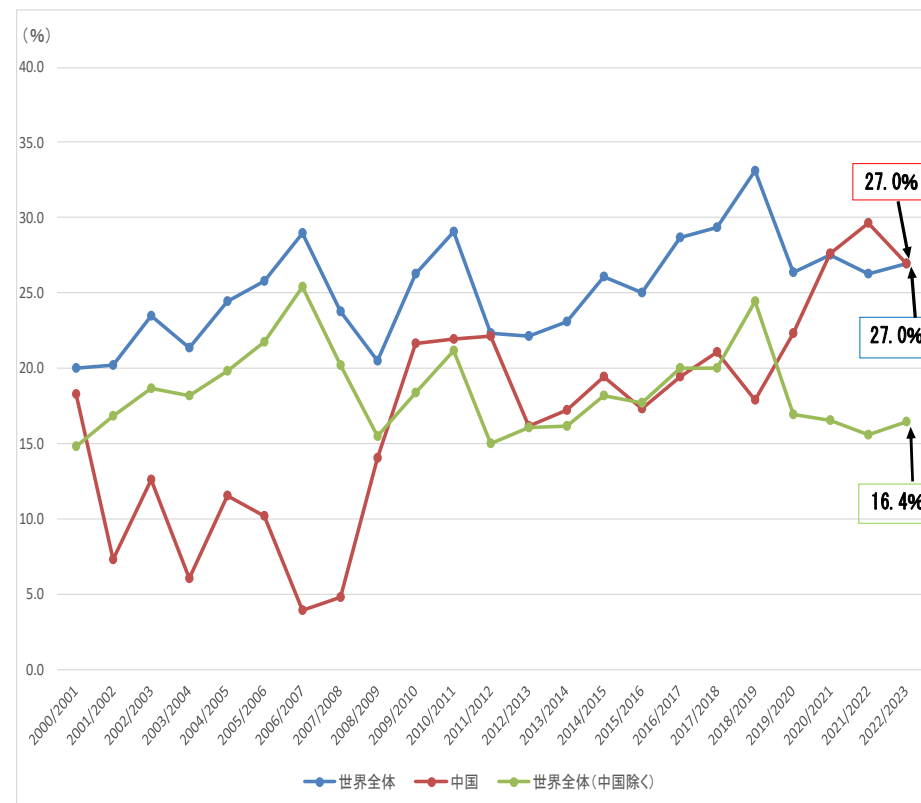
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(December 9, 2022)

注：1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等（大豆除く）。

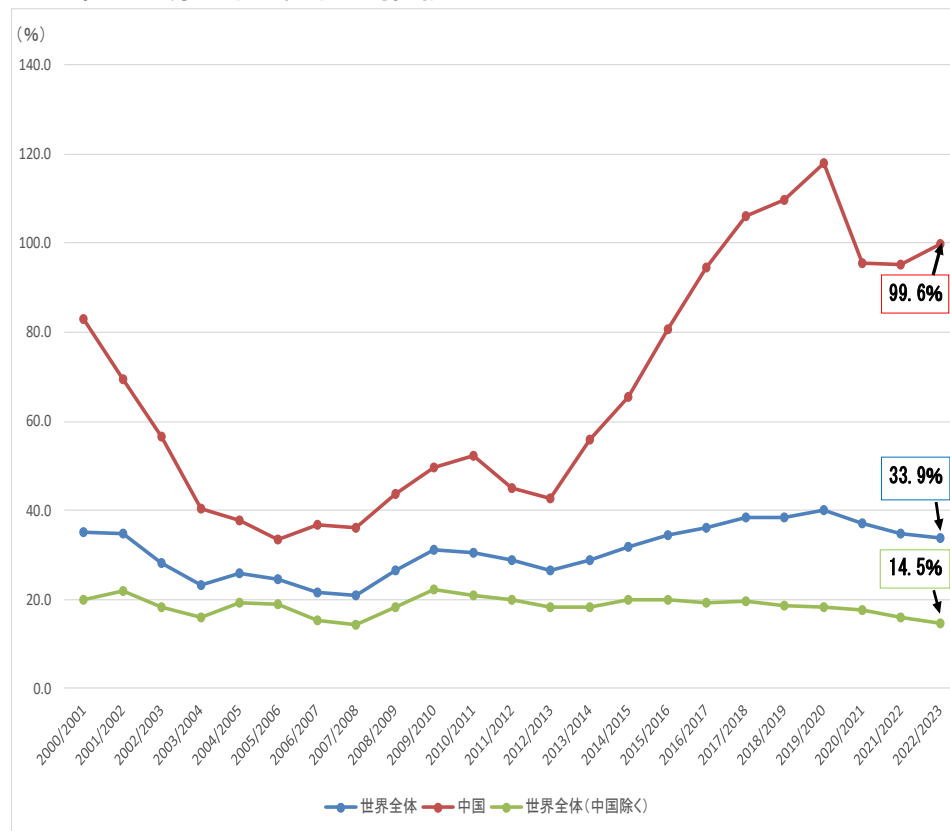
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

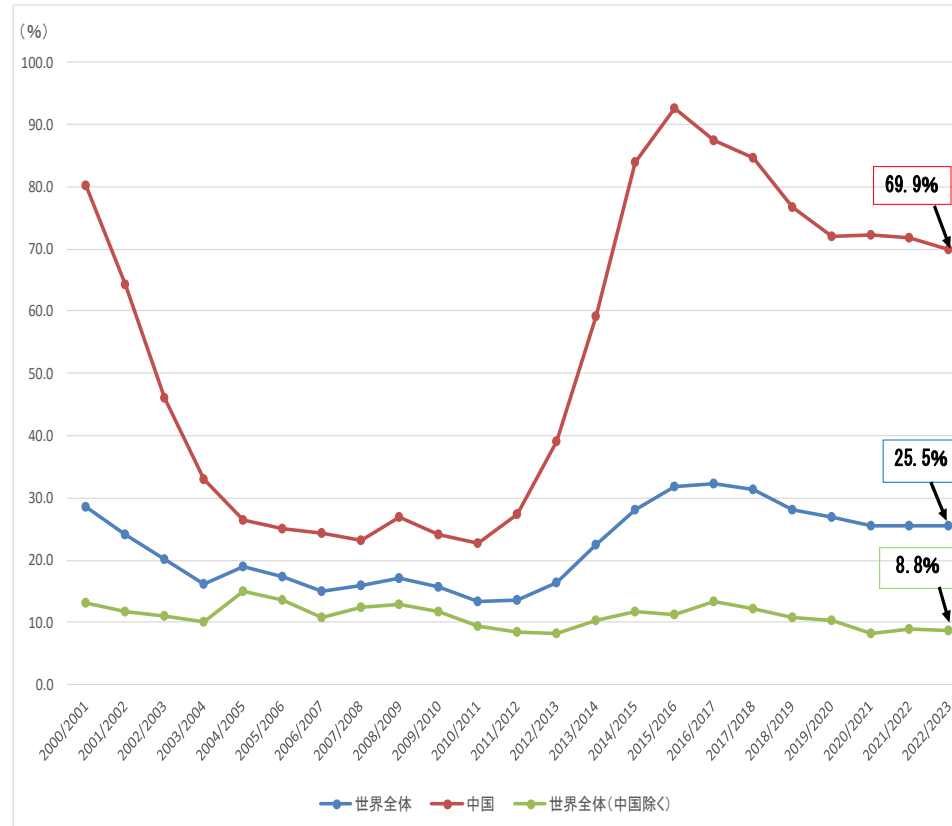
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(December 9, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

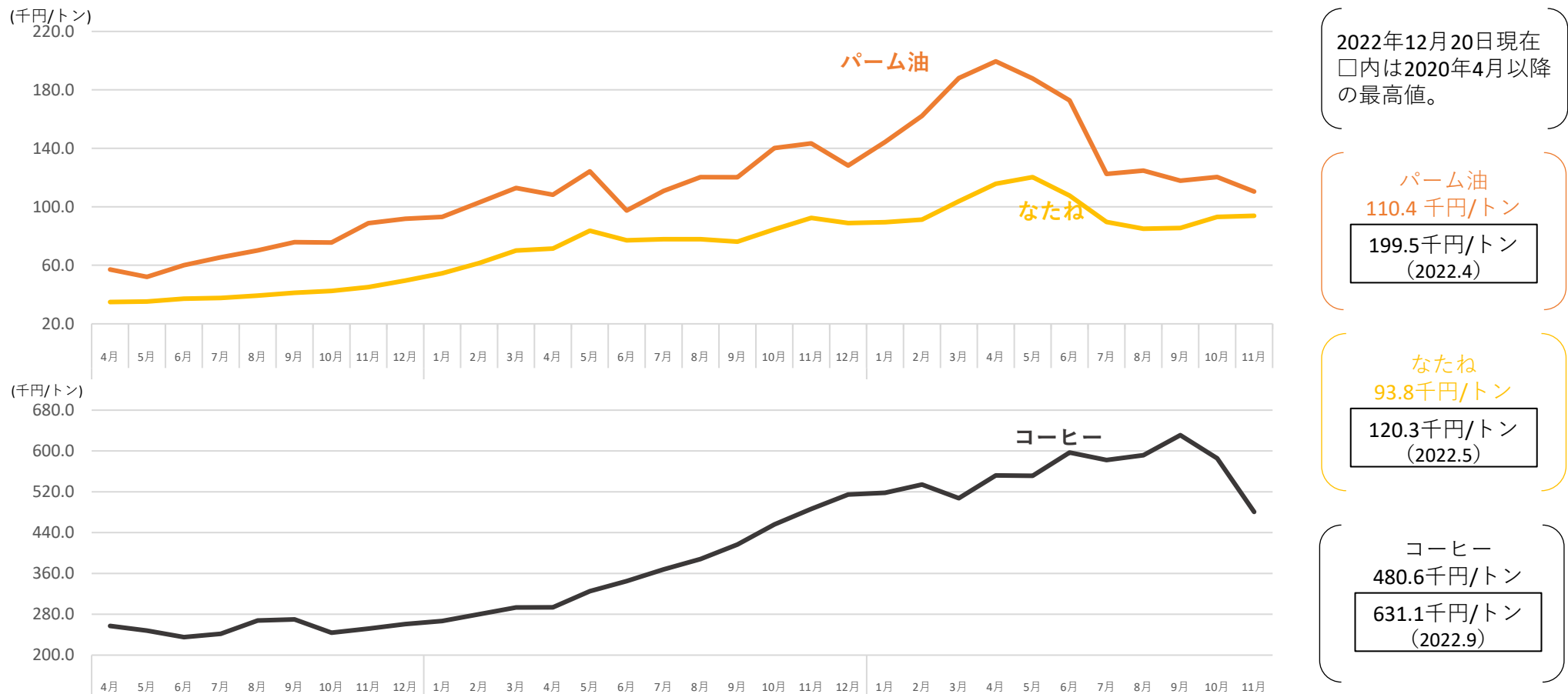
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

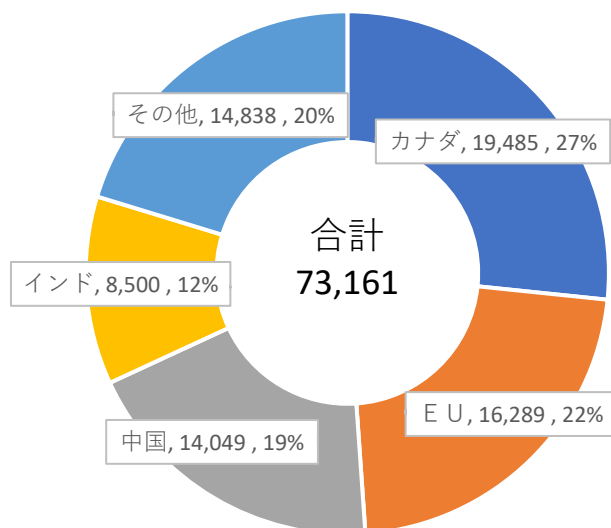


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

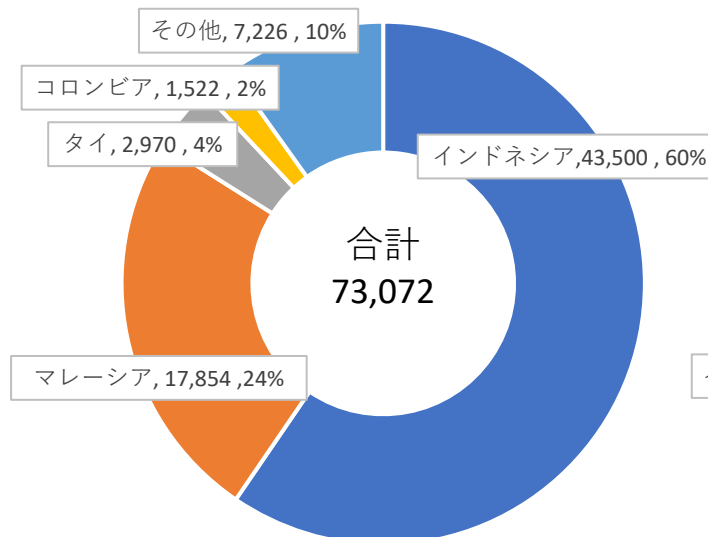
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



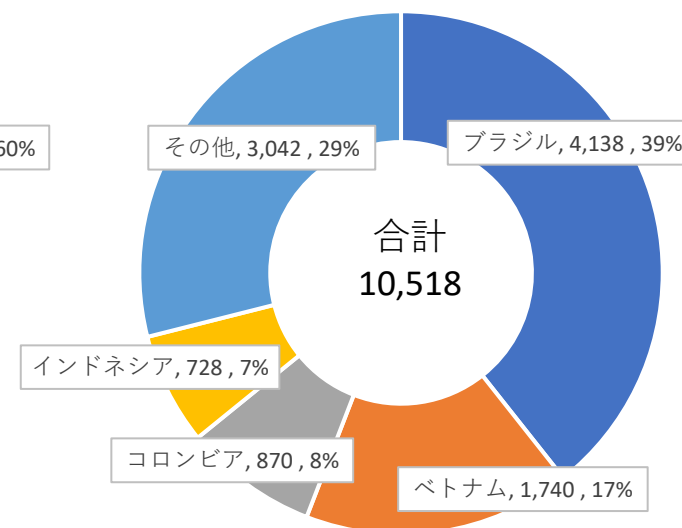
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年11月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.5～162.7（前年同月比で－1.3%～35.0%）の範囲内。

【参考】

消費者物価指数（総務省） （令和4年6月～令和4年11月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.9	111.9	114.4	113.8	113.7	114.2	14.5%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	110.0	113.7	114.9	112.4	112.3	114.2	13.1%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	104.7	104.9	105.1	106.7	108.3	109.1	6.3%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	139.2	145.8	150.4	156.8	160.2	162.7	35.0%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.8	99.9	100.1	103.4	103.6	104.9	5.3%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	125.0	125.2	126.5	127.0	133.7	136.1	21.0%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	104.0	106.2	106.6	113.2	117.1	118.6	23.7%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.3	99.1	99.4	98.7	98.8	98.5	-1.3%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	103.2	103.8	104.2	105.0	106.7	107.9	6.8%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年6月～令和4年12月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	105.9	109.8	111.1	110.7	110.9	111.3	112.2	0.8%	14.0%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	110.0	111.2	111.2	110.0	110.0	110.6	110.6	0.0%	13.1%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	102.9	103.3	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	0.4%	6.9%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	132.7	139.1	148.3	156.8	160.6	161.2	161.2	0.0%	38.6%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.8	99.8	100.4	101.7	102.5	102.7	102.7	0.0%	5.3%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	118.3	117.2	118.3	116.9	126.2	128.9	128.3	-0.5%	21.5%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	105.0	105.0	104.5	108.0	114.4	115.4	110.9	-3.9%	20.4%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.3	99.0	99.3	98.6	98.6	98.6	98.6	0.0%	-1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年1月号（12月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛価格、今年最高値を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002528.html

（豪州）牛群再構築段階ながらも、と畜頭数が増加傾向の兆し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002529.html

（中国）コロナ禍にあっても牛肉輸入量は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002530.html

◆豚肉

（EU）豚肉供給量の減少は続き、豚肉価格は高値を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002531.html

（ブラジル）22年の豚肉輸出量は4年ぶりに減少傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002532.html

◆鶏肉

（米国）鶏肉供給増で卸売価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002533.html

（ブラジル）22年の鶏肉輸出は単価大幅高の中、堅調に推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002534.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）国内外の旺盛な需要を背景に、バターの卸売価格は高水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002535.html

（EU）主要生産国の生乳出荷量、前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002536.html

（NZ）生乳生産量、引き続き前年割れで推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002537.html

（中国）生乳生産量の増加傾向、乳製品輸入量の減少傾向、ともに続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002538.html

◆飼料穀物

（世界）生産量と消費量の乖離が拡大し、期末在庫は前年度比微減の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002539.html

（世界）米国の生産量は上方修正、世界期末在庫は引き続き1億トンを維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002540.html

（米国）米国生産量は4カ月ぶりに上方修正されるも期末在庫率は引き続き低水準

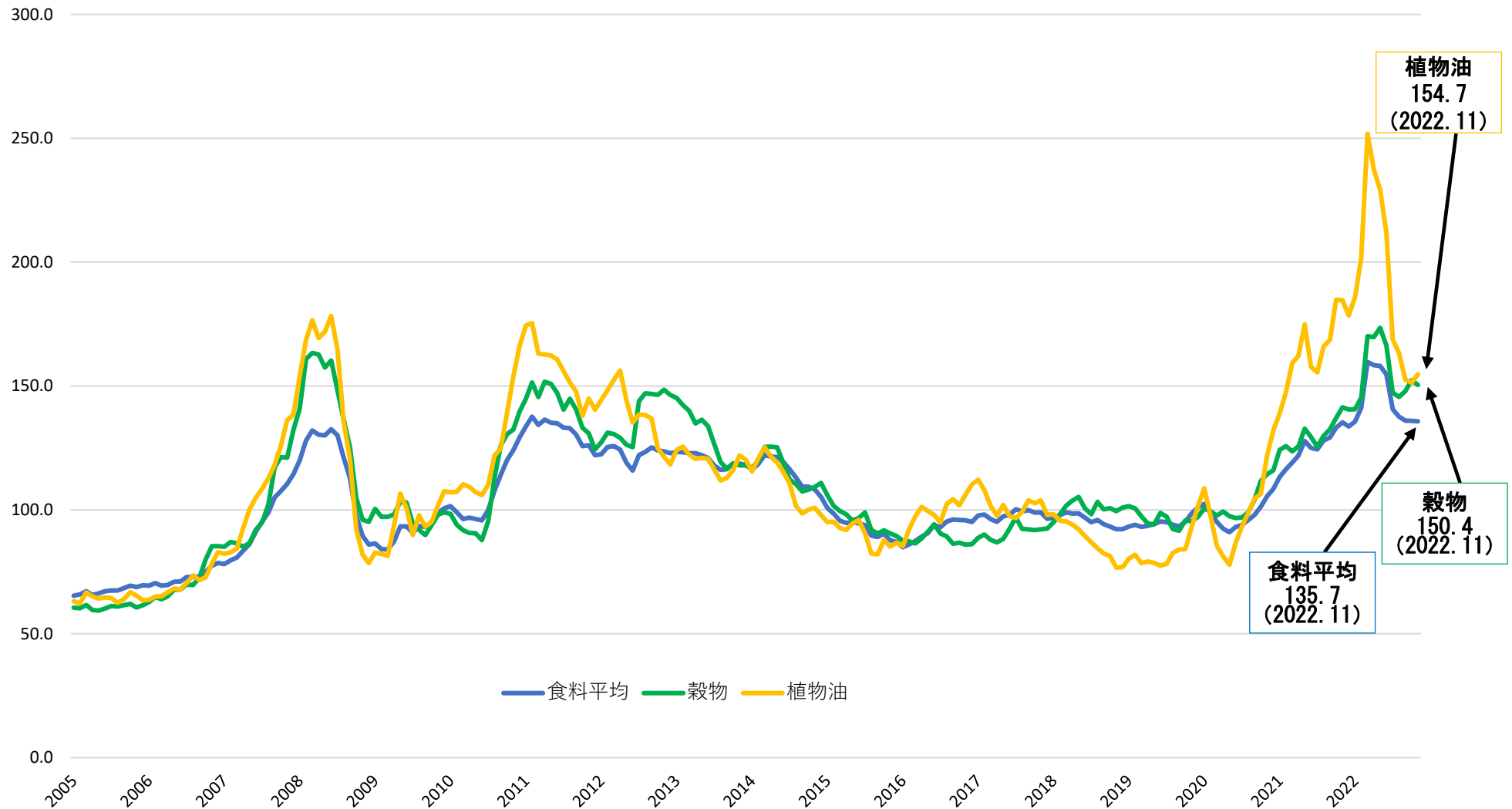
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002541.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002542.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.12)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等